



第22回

幼い兄姉
弟妹を亡くした子どもたち

幼い子どもの闘病中や万一亡くなった後は、医療者も家族も、子どもの兄弟姉妹にまでは目が届かなくなる場面があります。では幼い子どもたち自身は、どんな思いで、どう過ごしているのでしょうか？

*

6歳の智君は、お友達の家赤ちゃんが生まれたのを見て、自分も欲しくてたまりません。ママが「智君もお兄ちゃんになるよ」と話してくれて、とても楽しみにしていました。お留守番ができないので、ママが病院に行くときも一緒でした。

実はママは、12週で染色体異常が疑われ、その後に18トリソミーと判明。「長くは生きられない」という医師の言葉に「さ～っと血の気が引く音を自分で感じた」ほどの不安や怒りや悲しみに動転の日々でした。

パパとママは「小さい智君にも赤ちゃんの病気がことが分かったほうが良いから伝えよう、亡くなったとしても赤ちゃんを抱っこしないとときょうだいの実感が持てないから抱かせよう」と相談していました。

そして出産予定日。赤ちゃんの心音は止まっていました。どう伝えればいいのか……。ママは赤ちゃんを楽しみに待っていた智君の目を見ることができなくて、おでことおでこをくっつけて「赤ちゃん、死んじゃった」。やっとそれだけ言うと、あとは涙でした。

智君は、待ちに待った赤ちゃんを抱っこして「わーい赤ちゃんだ」。でもすぐに赤ちゃんの状態に気がつき、ママの悲しむ顔で察して、大粒の涙をぼろぼろ。ママは「赤ちゃんは死んでしまったけれど、死なない人はいないから、これから智君とパパとママと3人で生きていこうね」。智君もただ涙で、

返事はありませんでした。

ママの退院後、智君のお友だちが家に遊びに来ると無邪気に「赤ちゃんどこ？」と聞きます。担任の先生が「赤ちゃんが亡くなったことを、保護者会でお伝えしましょうか」と言ってくれたけれど、大げさにしたくなくて、それは遠慮しました。

ママが智君の心理的な問題について学校に相談したときは、教頭先生から電話がありました。「子供

は悲しくても学校に来れば友達とも遊ぶし、大人と違っていつも悲しんでばかりではないので、大丈夫でしょう。息子さんは貴重な経験をしましたね。人生良いことばかりではないと知り、優しい人になりますね」と。

泣いてばかりのママは、ある日智君に「ママを置いていかないで」と言ってしまいました。

智君は「ママ泣いてちゃだめだよ。ママが言ったんだよ、3人で生きていこうって」。子どもなりにしっかり心に留めていたのですね。

*

たいていの病棟は「小さいお子さんは、ご遠慮ください」。そんなとき、過ごせる場があり、だれか見守る人がいると良いのですが……。

ある病院の患者図書室ボランティアの話です。病室に入れられないお子さんが連れられてくると、母親が去ってしまうととたんに堰を切ったようにしゃべりだして、うるさいくらい。看病をする親に気を使って我慢していたのでしょうか。ほかに利用者がいなければ遊んでいいと、ボランティアも大目に見ています。

専用のスペースや担当者が用意できればいいのでしょう。でもそれができなくても、院内のどこでも、誰かがしばし相手をするすることで、幼い兄姉の臨時的居場所ができそうです。



おもちゃや本は、幼い子どもの必需品。「お気に入りを持ってきてね」と伝えたり、スタッフの持ち寄りも。